

明末清初の満洲氏族とその源流

三 田 村 泰 助

會つて清太祖實錄に收められてある開國説話並に清帝室の直接の祖とされるニングタベイレを對象としてその成立過程を究明し、太祖の世系が歴史的には建州左右衛に由來し、それが當時の氏族制社會を基盤として成立したものであることをのべた。^①然し問題を主として帝室の世系に限つたため、太祖の後金國成立に際し、その推進力となつて太祖を助けた満洲氏族集團の考察にはほとんど觸れる所がなかつた。本論においては、主として天命期に太祖政權の軸となつた満洲氏族について、その社會的身分を明らかにし、その源流をたづねることによつて清室との歴史的結合關係を究めたいと思ふ。

八旗満洲氏族通譜にはおよそ六百四十二の姓氏が著録されてゐる。^②これ等が満洲旗人社會を構成するわけであるが、その中、満洲八旗の中核的存在として歴史的に活躍するものは、後述するごとく、通譜の始めの部分に收められてある諸氏族に限定してよいと思ふ。いま通譜の排列順に従へば、1 瓜爾佳氏、2 鈕祜祿氏、3 舒穆祿氏、4 馬佳氏、5 董鄂氏、6 赫舍里氏、7 他塔喇氏、8 覺羅氏(伊爾根覺羅、舒々覺羅、西林覺羅、通顔覺羅) 9 佟佳氏、10 那木都魯氏、11 納喇氏、12 富察氏、13 完顔氏などをあげ得よう。

これ等の氏族集團は何等かの形で、清の太祖の政權に結びついた氏族であるが、その起源や内部構成に至つてはもとより多種多様なことは言ふまでもない。

いまそれ等について個々の問題に入る前に、一應満洲氏

族の基本的性格についてふれておく必要があらう。

一體清朝が入關してシナ本土に君臨した際、その政權を支へる滿洲旗人社會が如何なる性格のものであつたかといふこと、例へば氏族制社會か或は家族制のそれか、また中間的性格であつたかは重要な問題に屬する。ところで、この種の問題を取扱ふと、早速につきあたる障害にシナ文化の滿洲社會への影響性の問題がある。滿洲社會がシナ文化圏に接觸するにつれてその影響を受ける度合はこれに比例し、母國語忘却の現象などはその最たる例であるが、これを社會構成の面の上から見ると、シナ家族制の影響が考慮されねばならぬ。さしあたり公私の家譜の編纂などに當面の課題が見出される。李徳啓の滿文書籍聯合目錄によれば、瓜爾佳氏について「鑲黃正黃鑲白三旗蘇完瓜爾佳氏家譜」といつた大掛りな家譜があられたことを知る。その影響は當然言語の上に反映し、家譜の語をそのまま音寫した「ギヤブ」或は「ジャブ」*giyapu* の語や或は「バオ||イ||ダルガン」*boo i dargan* (家の系譜の義)^⑤の語が成立使用されてくる。こういった語の出現はすでにそれが社會的機能を果しつゝあることを意味するものであらう。こ

のやうに公私にわたつて家譜が編まれることは、一應その屬する社會の構成が家族制のそれを基とするものといはなければならぬ。従つて清朝政權下の旗人社會は家族制を基盤としたものであるといふ歸結になるであらう。然し文化現象と社會現象とはなほ遊離して、實體はそのやうに斷定するにはほど遠いものがあつたやうに思ふ。もちろん家譜の編纂はシナ社會の産んだ特有な文化的表現であつたとしても、とも角その編纂が可能なことは、滿洲社會に家族制の形態が存在していたからなのであつた。事實、社會の發展の過程内に於て、家族制と氏族制の限界はその區別の困難なことは周知のことであつて、すでにその社會の表面層が家族制に分斷されつゝあつても、内部層にはなほ氏族制的形態によつて結合されている場合が存するからである。結局その決定はその社會を貫いている共同體の原理の性格いかんにかゝつてくるといへよう。そうした觀點に立つ時、滿洲社會構成の原理は依然氏族制といふ種族共同體のそれに立つものと思はれる。そのことはこの種の社會に於て最も重要な祭祀の行事の中に見られることは會つて説いたところであつて、いま詳述をさけるが、なほつぎにあげる二

ユフル鈕祜祿 *niuhuru* 氏の例によつてそのことを確めよう。ニユフル氏は瓜爾佳氏と並ぶ名族であるが、氏族通譜卷五の同氏の條に、乾隆二年果毅公ネチン納親 *nechin* が會祖父である國家の元勳エイド―バツル額亦都巴圖魯 *aidu* = *baturu* の祠堂を、ムクン *mukun* (氏族) の會所に立て、祭典を恩賜されて、ムクン全員に報本の恩をのべさせることを願ひ出て許されてゐることが記されてゐる。この記事は、祖先の祭祀といふ種族團結のための基本的行事が、ムクン即ち氏族を單位として行はれてゐることを證據だてゝいるのであつて、それがなほ乾隆の初期に存続してゐることに注目されねばならぬ。結局こゝに見るが如き祭祀を通じての氏族制の性格が、實に滿洲旗人社會に共通した一般の性格であつたので、そのことは乾隆十二年に下された上諭によつて確認されよう。「我が滿洲は天、佛と神とを恭ひ祀る。その禮は均しく重く、たゞ姓氏は各殊り、禮は皆俗に隨ふ。凡そ祭神、祭天、背鏡の諸祭は微や同じからざるありと雖も、大端は甚しく相遠からず。我が愛親覺羅姓の祭神の如きは、則ち大内より王公の家に至る皆祝辭を以つて重きとなす云々」とある通りである。これによつて知

られる如く祭祀行事の同一性は、その據る社會構造の同一性を意味する。なほ文中の「我が愛親覺羅姓の祭神」といふ表現は、滿文には「われ等のギユロ姓の祭祀 *meni gioroi hala wecerengege*」となつてゐる。これ萬民に超絶せる帝室と雖も、その内部社會にあつては、他ならぬ氏族の一成員たる存在に過ぎぬことを明示するものであらう。

このやうにして滿洲八旗は入關后と雖も依然氏族制を維持してゐたといへよう。社會の進化の法則から見ると、不可解にも思はれる氏族制の維持が、實は滿洲旗人社會存立の本質を形成してゐたのであつた。換言すれば滿洲社會が完全に家族制に移行した時は、既に滿洲族の個有性を喪失した時といへるのである。これ等の事情をもつとも深く洞察し、その危機に對處したものは雍正帝であつたと思ふ。

その現はれ的一端が滿洲氏族通譜の編纂であつたのではないからうか。この書の滿文序文の中に、まづ書經の一句を引いて「生まれによつてハラ *hala* (姓の義) を與へ、地を分けてムクン *mukun* とした」として明確にハラ・ムクンを定義し、ついで族譜の効用を説き「ムクン・ハラの書は人情の乖離をつなぎ、フェーカオリ (舊來のしきたり)

のすたれるのを防ぐものである。思ふに昔の老マンジユ等の遺風は質實淳朴であつた。決してムクンの高貴さを互に誇ることはなかつた。この書の編纂は魏晉隋唐の譜牒が博聞をひけらかし、附會を廣くし、高貴勳奮を誇るのとは似ないものである」と記してゐる。この書が質實な滿洲族の團結をはかるための氏族の系譜であつて、門閥貴族の社會に派生した譜學に基く家譜でないことを強調している。この序から窺へることは、雍正帝が氏族精神の維持に旗人社會の存續をかけたといふことがいへるであらう。恐らく漢化しかけた旗人達が「ギャブ」の編纂に憧れることに對する抑壓を意味するものといへる。この方針を冷嚴なる帝は徒に家臣に強制することはせず、率先範をたれて帝室の系譜の上に適用した。すでに説いたやうに、太祖實錄に記された帝系は入關前に於けるそれがニングタ^⑧||ベイレの構成によつて知られるやうに氏族譜でしかなかつた。康熙改修實錄に見られる重要な要素の一は、この氏族譜に對し家譜を設定することにあつた。然しながら再び太祖實錄を纂修した雍正帝は、父康熙帝の改修を大膽にも再訂正し、この家譜の面を削除することを敢へてした。こゝに雍正改修の

歴史的意味を見出すべきである。氏族通譜の編纂と併せ考へれば、上は帝室より下は弱少旗人に至るまで、滿洲旗人社會が氏族制を以つてその建て前としたことが確認出来るであらう。

一般的性格は以上の通りであるが、つぎに氏族通譜の初めに存する八旗の諸氏族の系列がいかなる經過を辿つて成り立つかを考察しよう。

二

嘯亭雜錄卷十に「八大家」と題して、つぎのやうにのべてゐる。

滿洲氏族。以瓜爾佳氏直義公之後。鈕祜祿氏宏毅公之後。舒穆祿氏武勳王之後。納蘭氏金臺吉之後。董鄂氏溫順公之後。輝發氏阿蘭泰之後。烏喇氏卜占泰之後。伊爾根覺羅氏某之後。馬佳氏文襄公之後。爲八大家云。凡尙主選婚。以及賞賜功臣奴僕。皆以八族爲最云。

右に名を連ねた八大家が八大ムクンの謂であることは文義より疑ないところであつて、帝室と縁組みされることから推して、この八大ムクンがアイシン^⑨||ギユロ姓を頂點として編成された滿洲貴族階級の最高峰に位置するものである

ければならぬ。

いまその家系をたづねると、まづ八大家の中、納蘭氏輝發氏烏喇氏はかつて海西女直いはゆるフルン^{II}グルンのハ^ン或はベイレとして榮えたムクンであつた。そのうちの烏喇氏の祖とされるブジャンタイは、アイシン^{II}ギユロ姓のヌルハチを評して「老可赤(ヌルハチ)は本より無名常胡の子を以つて崛起せるものなり。酋長となりて諸部を合併し其勢漸く強大に至る。我輩に世積の威名あり。與に伍となるを羞づ^⑤」とのべたといふ。これヌルハチがすでに建州國汗を稱して居た萬曆三十三年ごろのことである。もつてフルン諸部の威名を知ることが出来る。このウラは海西女直中でも前金の帝室完顔部の遺種と目されていた。馮璦の開原圖説にウラの分派であるハダ部の王忠について「忠蓋金完顔氏正派。夷呼完顔爲王。故其後世子孫以王爲姓」とのべている如くである。これが全くの妄僞でないことは、フルン國のエホ部の習俗について申忠一の圖録に「如許(鮮音 yoho)人。大着白氈衣」とのべている事實を、大金國志に見える「金俗。好衣白^⑥」とある記述に照應させると理解がつくであらう。やはり完顔の遺風はうけつがれていた

ものといへよう。これに對し太祖の建州左衛に「大金の支裔」の傳稱が存したが、問題にされず無名の常胡視されたのであつた。今や恩讐をこへて、清朝の名の下に臣籍にたらなることになつたが、いはゆる王種として門地の高さを占めることは當然といへよう。一面かうなることのうちに、力による征服・被征服の關係をこえて、尊貴なるギラン(siran(骨種)フレへtulhe(門地)によつて秩序づけられる女眞社會の傳統の根づよさを物語るものであらう。嘯亭雜錄卷十に「舒太夫人」の項がある。この夫人は八大家の一の馬佳氏の出で、文襄公の曾孫女に當る。この夫人の語に「吾は貴族と雖も、然れども能く忠義の士と結んで親誼をなす」といつてある。これは門地に拘束されずに婚姻を結んだ佳話の中の一句であるが、そのことは逆に身分階級の深刻さを物語つてゐる。同項に、

滿洲舊俗。凡所婚娶。必視其氏族之高下。初不計其一時之貧富。有時惑於勢利之見。以致以賤凌貴。以高就下。人多恥之

とあることは上記の事實を概括するものである。

ところで前記八大家の中、フルン^{II}グルン關係を除いた六家はいかにして貴種たり得たであらうか。こゝに於て時

代を入關後の後金國成立時代まで遡つて見よう。同じく雜錄に太祖の天命初期に於ける五大臣のことがのべられてゐる。即ち同書卷二五大臣の項に、

國初。太祖時。以瓜爾佳信勇公費英東。鈕祜祿宏毅公額亦都。董鄂溫順公何和理。佟忠烈公扈爾漢。覺羅公安費揚古爲五大臣。凡軍國重務。皆命贊決焉。

とある。八大家の場合、大清帝國として滿漢蒙支配のゆるぎない政權下の門閥を意味したわけであるが、右の記事は太祖がその礎石をきづいたばかりの後金國成立期の状況を物語るものであつた。五大臣は天命初期に於ける最高の執政機關とされたのであるから、その地位にあるものは何れ當時における特權階級を形作つてゐるものでなければならぬ。これを八大家の記事にくらべると、瓜爾佳氏・鈕祜祿氏・董鄂氏が共通してその名をつらねてゐる。他の三家については後にふれるとして、新に佟氏と覺羅氏の名が見えてゐる。佟氏が太祖の建州衛酋時代の姓であつたことは周知の事實であり、また覺羅姓がその滿洲姓であつて見ると、この二姓のものが存したとて格別ふしぎはないのであるが、それ等がのちの八大家の中に名を記されないこと

に興味がある。そのことには一應草創期に於ける勢力轉換の烈しさの因が考へられるが、一步立入つて見ると、それはそれなりに理由があると思ふ。即ち氏族の高下の問題がやはりからんでゐるのではなからうか。そのことを検討して見よう。

まづ覺羅公安費揚古について見ると、彼はもとシヨコロ^ロ||^ロバツル碩翁科洛巴圖叢 songkoro-baturu (鷹の勇士)のタイトルできこえた猛將であるが、その系譜は詳かでない。實は雜錄に覺羅公と記しているが、碑傳集その他の記録にこのような爵位を持つた記事は見えない。そう思つて雜錄を見ると、彼の場合のみ姓を記していない。碑傳集卷三の傳へるところでは、彼の姓はギウルチャ覺爾察 siorca であるが、この姓はまたふしぎなことに氏族通譜には著録されてゐない。ギウルチャの名は、太祖實錄にニングタ^レ||^レベイレの長祖即ち太祖の祖父の長兄に當るデシク^クの居た地名として見える。その名稱の成立について見ると、この語が sioro+ca の合成語であつて、ca は「塞」の對音にあたる。つまりギユロ姓のものの支配した地域乃至聚落を意味する。碑傳集に「父完布祿は樸忠を以つて我が太

祖に事ふ」とあるから、結局彼がギユロ族の譜内のジュセン（隸臣）か或はバオイニヤルマ（家人）であつたやうに思ふ。そのことはなほ碑傳集の「章甲・尼麻喇人の謀叛せしめんと誘ふあるも、従はず」とある記事からも窺へる。ジャンギヤ章甲 *jangg'ya'*、ニマラ尼麻喇 *nimala(n)* はニングダ||ベイレの中のバオランガ、バオシの支配地で、その地の人とはワンプルを含めてニングタ||アイマンの隸臣達を指すのである。もつてアンフイヤングが家僕階級に屬するものであることが分る。結局覺羅公は雜錄の著者のつけた美稱に過ぎず、そうであつて見れば彼がエイドと共に開國の功臣の首とされても、その氏族が顯はれなかつたのは當然であらう。

つぎは佟氏である。この姓の一族と太祖との關係はすでに説いた如く、並々ならぬものがあつた。太祖の最初の妃はこの氏族から出た佟氏であつて、この妃を納めた時期は、太祖實錄に太祖が十九で分家したとあることから、恐らく萬曆五年ごろとして誤らないであらう。褚英・代善の二子があつたが、褚英は太祖に幽殺されている。ところで五大臣の一人であつた佟クルガンは、太祖の姉の子で、従つて太祖

の義理の甥に當るわけであるが太祖はギユロ姓を與へて養子となした。その寵愛さのほどが知られるが、彼の晩年は太祖に忌避され失脚した。これほどの氏族がその後顯はれなかつたことには褚英・クルガンの失脚の理由も考へられるが、一方代善はアンバベイレ則ち第一執政王であると共に氏の長者でもあつたことを思ふと俄にそのように断定出さない。結局、その背後に佟氏の門地の低さがあつたやうに思へる。太祖老檔卷六〇に「ダルハン||ヒヤは元來地方のバイ||ニヤルマ *bai niyalma*（平民）の子であつた」と記している。そう思つて見ると、太祖實錄に太宗の母や睿親王の母にはアンバ||フジン *amba fujin*（正妃）とあるに對し、佟氏は單にフジンとしか記されていない。前二者はエホ||ナラ氏の出であるから、そこに出自の身分の違が反映しているのであらう。佟氏が漢熟化せる女真人として早くから明朝の招撫を受け、その活躍によつて名を知られたのであるが、建州衛なかんづく左衛の主流であるオドリ族からは別個の存在とされたのであらう。傳統的な滿洲社會の内部ではいはれるほどに名門でなかつたことは、通譜でもその氏族は繁昌しているが、著姓であつたとは記載

していないことによつて知られる。

かう見てくると、佟氏・覺爾察氏が天命期の五大臣の列になりながら、つひに八大家に入らなかつた事情も明らかになつたと思ふ。なほ太祖の佟姓襲名のいきさつは曾つて説いたところであるが、この姓が太祖の本來のムクン^{II}ハラではなく、強いて佟姓にこだはるならば「童」姓をもつて表はさるべきものであつた。たまたまそれが父祖の代から佟姓であるやうに明、朝鮮側に著録され、彼等もまたそれを踏襲したことが太祖佟姓の由來であらう。その便宜的な理由から出たことには、この時期が彼等にとつて、明、朝鮮との圓滑な交渉の望まれていた時であつたからと推測される。佟氏が對明折衝に重要な役割をもつたこともすでに説いたが、この氏族が明初以來、三萬衛はじめ遼東の明の出先機關に占める地位と、一面商胡階級として太祖政權を支へる重要な經濟メンバーであつたことを考慮すると、太祖にとつてまたとなき氏族であつたといへるであらう。ぐわんらい滿洲内部社會にあつては、漢姓が氏族制的機能強く發揮したとは考へられず、彼等自身それほど執着しなかつたことは、申忠一の圖録を見ると一見して分ること

で、建州左衛の部衆名は殆どその領主氏族名である童姓を襲ひツンギヤ姓の佟氏も童姓で寫されてゐることから理解されよう。

そこでいへることは、天命期の後金國成立の際にあつては、その政權を築くに必要な支柱として土着の漢化武人階級乃至商胡階級に屬する佟氏と日夜樸忠を以つて太祖を守護する家人階級出の覺爾察氏が重用されたのであらう。それが大清帝國の時代となり、平和と榮光の秩序が恢復してくると、この二氏は自ら低からざるを得なかつたといふことであらう。

改めて雜録の八大家について検討してみると、それ等は後述の如く何れも古くから建州左衛のオドリ幹朶里 *odoli* 族と密接な關係のあつた氏族群であつたやうである。

いま八旗氏族通譜によつてそれ等の系統と分布地域を調べるとつぎのやうなことになる。

まづグルルギヤ瓜爾佳 *suwalsiya* である。通譜にこの姓が地名から起り、それが滿洲族の著姓 *lietuilehe mukun* であつてその族人が頗る多いことを記し、つぎに氏族の分布を記述してゐる。即ちスワン蘇完 *suwan*、アンチユラ

ク安褚拉庫 *anculaku'* ニマチャ尼麻車 *nimaca'* ワルカ
 瓦爾喀 *warka'* ギヤムフ嘉木湖 *giyamhu'* コルミン
 ヤンギヤンニアリン長白山 *golmin-sanggiyan-alin'* フ
 ユーホトン蜚悠城 *fiu-hoton'* ホイフア輝發 *hoifa'* ハダ
 哈達 *hada'* エホ葉赫 *yeh'e'* ウラ烏喇 *ula'* ネエン訥殷
neyen' の地域である。なを通譜ではスワンのムクンが最
 も顯はれたとしているが、この系統から直義公フュンドン
 が出たのであつた。この氏族は頗る注目に價する氏族で、
 後述の如く明代に著聞する毛隣衛の部衆であつたと考へら
 れる。その分布の地域を見ると、エホ・ハダ・ホイフア・
 ウラなどのフルン國の支配下のものを除き、ギヤムフが恐
 らく興京地方のスクスフ河の地にある以外は、長白山から
 東北滿鮮國境地方にあつたといへる。アンチュラクが長白
 山の北方、頭道・二道白河の地方、ネエンが松花江の上源
 湯河の支流であるから、長白山地方と併せて何れも長白山
 の山麓をめぐつた地域である。スワンもこれに隣接した地
 域であり、ワルカが海蘭河の流域、フユ城が豆滿江下流渾
 春の地、ニマチャがスイフン河の流域にあたる。

つぎにニユフル鈕祜祿 *niouuru'* 氏である。通譜に滿洲

著姓として、長白山地方及びエンゲ英額 *engge'* 地方をあ
 げている。後者は長白山地方から移住した分派で、長白山
 のニユフル氏から宏毅公エイドが出ている。

シュムル舒穆祿 *sumuru'* 氏も滿洲著姓として、クルカ
 庫爾喀 *kurka'*、フンチュン渾春 *huncun'*、ジュセリ朱舍
 里 *jušeri'* のそれをあげてゐる。クルカは太祖實録の東海
 諸部の一に當る地方であり、ジュセリは恐らく長白山地方
 に比定せらる。このクルカのシュムル氏より武勳王ヤング
 リが出ている。

ドンゴ董鄂 *donggo'* 氏は通譜に、その姓が地名より出
 たとしているが、そうではなく、曾つて説いた如く渾春地
 方より遷住した建州左衛の系統をひくオドリ族の名門であ
 つて、溫順公ホホリの出た氏族である。

つぎにイルゲンニギョロ伊爾根覺羅 *irgen-gioro'* 氏で
 ある。このムクンは數あるギョロ姓の中の一氏族で、曾つ
 て説いた如く、蘇子河流域から佟家江流域、また鮮滿國境
 の豆滿江流域より興凱湖へ、さらに遠く松花江の地域にわ
 たつて分布してゐて、それ等が建州左右衛の中核的存在で
 あつたことは疑を容れぬところであらう。「イルゲン」の

語はもと蒙古語に出て、「民」の義があるが、その語がすでに明初に廣く女眞族間に使はれてゐたことは、李朝太祖實錄に「逸彦」鮮音 *iron* と見え、「女眞謂民爲逸彦」と説明していることによつて疑ない。これが平民といふ以上に自由民の性格をもつものであり、さらにそれが外來語であることを思へば、語の本來の意味は社會的身分の高さを示すものやうに思ふ。いま金史國語解を見ると「諸移里董」の語が見え、その解にこの語がもと遼語に基づくもので「部落墟皆之首領」の義としてゐる。これによつて知られるやうに、その社會的身分の上限は部落やとりでの首領で、これが部族或は國の支配者であるハン・ベイレにつぐ存在であつたといへよう。もつともその下限は隸臣たるジュセンにまで到るであらう。この間の關係を物語るものとして太祖實錄のつぎの記事をあげ得よう。太祖が擧兵の後、このイルゲン||ギョロに屬し、蘇子河流域のギヤムフ地方の酋長であつたガガハシャン||ハスフが、他の同姓の酋長と語り、「アイシン||ギョロ姓のニングタ||ベイセに從はう」といひ、太祖に「自分等をジュセンとするな。兄弟のやうに遇して欲しい」とのべ、牛を殺して天を祭り、

忠誠の誓をなしたとある。同じギョロ姓でありながら、「アイシン」がハン・ベイレのギョロ姓であるに對し、「イルゲン」が部落墟皆の首領に附せられたムクン||ハラであることが了解できよう。その主從關係を結ぶに當つて、犠牲を用ひて天を祀る行事を行ふところに自由民の性格が窺ひ得られる。恐らくは金代以來の諸移里董の官職に由來した氏族の名といへるであらう。太祖はこのガハシャンに自分の妹を與へてゐるが、太祖實錄によると恐らくこの後のことであらうが、側妃としてイルゲン||ギョロ氏を納めてゐる。後年猛將として活躍するアバタイはその所出にかゝはる。實錄にエホナラ氏をアンバ||フジン、佟氏をフジンとなすに對し、イルゲン||ギョロ氏はアスハン||フジン *ashan fujin* (側妃の義) と記されている。前引雜錄の記事によつて知られるやうに氏族社會内における階層の差が明らか

に看取されよう。最後にマギヤ馬佳 *magiya* 氏である。通譜にスイフン綏分 *sufun*、マギヤ馬佳 *magiya* をあげている。このハラは恐らく李朝實錄に頻出するオドリ族の著姓馬氏と關係があるとしてよい。スイフンが既述のスイフン河流域、マ

ギャが佟佳江の支流ヤルグ河流域をさし、文襄公ヅハイはスイフン氏の出である。

以上八旗氏族通譜によつて六大ムクンとされるものの原住地を調べたのであるが、これを綜合すると、およそ長白山の山麓から、その東北方にあたる豆満江の北、海蘭河及び布爾哈圖河流域にかけて、さらに渾春平野から日本海にわたる地域であつたことを知る。この地域は周知の如く、明初に建州衛の被管とされ、^⑤ついで建州左衛並に毛隣衛が設置されたのであつた。六大ムクン中にオドリ族の著姓の存することから推して、これ等のムクンが何れも建州毛隣諸衛に支配的地位を占めていたであらうことは想像に難くない。そうすると六大ムクンとはすでに長白山の東方にあつた時以來の望族であつたといふことが出來よう。嘯亭雜錄に彼等を「八旗長白舊族」と總稱してゐる所以である。

いまその内部構成の一端を見ると、氏族制維持のための祭祀行事について、雜錄卷九に、

其長白滿洲舊族近興京域者。其祀典禮儀皆同

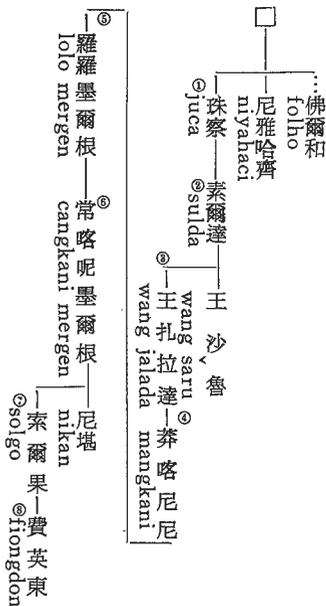
と記している。これその氏族群の社會構造の同一性を物語つてゐるものといへよう。その祭神のうちに如來や觀音が

見出されるのは、恐らく永樂年間に建州衛に建立された長白山白頭寺の影響であらうし、また長白山神の存在は南滿第一の名山に對する山嶽信仰の表はれであると同時に、金代以來の遺風^⑥を傳へるものであらう。なをシムル氏の祭神中に貂神が見られるのは、その狩獵制社會を象徴するものとして興味深い。とも角も長白山の東方の東間島の地域に、オドリ族を中核として大小幾多の氏族群が、同一祭神を共有すること、換言すれば文化の同一性を基盤としてそこに緊密な統合關係が存在したことは推測に餘ることである。

史上に名高き建州左衛の西遷に際し、長白の舊族であつた彼等も同時に、或は個別的に西遷し、やがて太祖の政權樹立にあつて、その重要な成員としてこれに參劃するに至つたと見るべきであらう。グワルギャ氏のフュンドン、ニユフル氏のエイド、シムル氏のヤングリについて、太祖は「我がなま身の如く幾星霜を共にしたアンバン」^⑦とのべているが、彼等こそは他ならぬ太祖のグチュ^⑧ guncu(朋友)であつた。それはチングスハンに於けるネケルに比すべき存在といへよう。佟氏或はギュルチャ氏とはまた性格を異にしたムクンであることが自ら理解されよう。

三

然らばこれ等長白の舊族はいつのころ成立したのであらうか。これに對して、氏族通譜には、ハダ・スワンのグワルギヤ、長白山のニユフル、ツンギヤの佟の諸氏族についてその族譜をのせている。その中からまずグワルギヤ氏の系圖をとつてつきにかゝげよう。

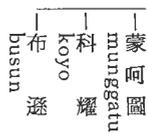
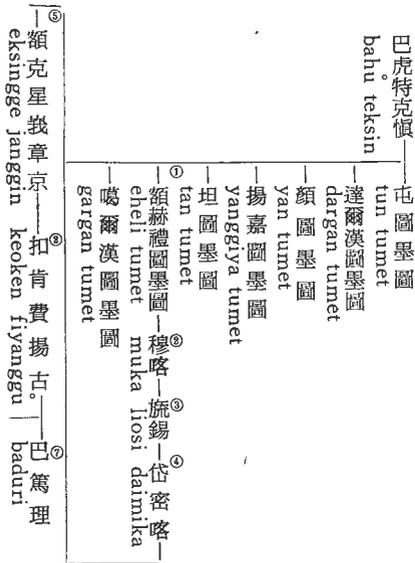


この系圖によつて、直義公フュンドンはジュチャを祖として八代目にあたる事が分る。彼の父ソルゴの時に太祖に來投したので、清太祖實錄に

酸之酋長葛兒氣陵兒戈。率本部軍民。歸太祖。以其子非英凍爲大臣

とある如くである。文中の葛兒氣^⑧はシナ音 *ko-er-chi* であるが、*chi* 音は入關前の滿洲語では *ki-gi* と發音するから、葛兒氣は *ko-er-gi* であつて、*guwalgiya* の音意であることに間違ひない。そうすると「グワルギヤ」は當時「コルギ」と訓まれてゐたことが知られる。そのことはまた後にふれることにして、このムクンは甚だ注目すべき氏族で、族譜にも首卷より第四卷まであてゝあることによつて知られる。ところでスワンの部長であつたこの世系の祖ジュチャについては、族譜につきのやうに説明している。即ちジュチャは三人兄弟の末弟で、兄のフォロホがスワンの地に居り、次のニヤハチはシベ席北 *side* に遷つたとしてゐる。後年シベ・グワルチャとして知られた部族の祖となるわけであるが、その事實のほどはこゝでは觸れないこととして、たゞこの氏族成立の特殊性を強調すれば足りる。末弟にあたるジュチャはスワンよりワルカを経て、シルヒアンガイ^⑨シルハドゴン 西爾希昂阿濟哈渡口 *silhi anggai jina dogon* の地に再遷したと記してゐる。この長い地名は滿文によつて分る如く、實は「シルヒ河口の渡船場」の意であらう。いまその地を遷任の經路から推して、

永樂五年に設置された喜樂溫河衛の所在地に比定したい。成祖實錄に喜樂溫 hsi-lo-wen をまた「喜刺烏 hsi-la-u 之地」とも寫しているからこれを「silhi」に比定して差支へないと思ふ。スワンの部長になつたのは七代目のソルゴの時であるから、その後再び西遷したに違ひない。然らば始祖ジュチャの年代をいつのころとすればよいであらうか。氏族通譜には勿論年代はこれを缺いてゐるが、他の族譜と比べ合はせると大體の見當はつけ得るようである。特に佟氏の場合は、ほとゝそれを裏づける明側の史料が存してゐるからである。つきに佟氏の系圖を掲げよう。



右の系圖はマチャ馬察 maca 地方の佟氏のもので、七代目のバドリの時マチャ地方より來投し、彼は十人のジャグチの一人となつたのである。この系統は始祖バフクシンの第六子を高祖とするものであるが、その第二子のダルハンツツは明初の奴兒干都司經營に活躍した有名な佟答刺哈である。彼の系圖は明の三萬衛選簿の内の佟國臣の項に著録されているから、それをつぎに掲げよう。



右の系圖の中、最後の應詔は萬曆廿八年に廿九才とあるから、バドリとほとゝ同時代と見做し得る。高祖答刺哈は洪武末年に軍籍に入つて居り、始祖滿只是洪武十六年に歸附している。これを通譜にあたると滿只是通譜のバフクシンの同一人物とならねばならぬ。たゞ相互の異稱について俄に解釋がつかぬことは遺憾である。なを長白山のニフル氏の系圖について見ると、その祖ソホチニヤン索和

濟巴額 *soloci bayan* からエイドまで七代⁸⁾を數へ得る。

以上佟氏、グワルギヤ氏、ニフル氏を通じて見ると、始祖乃至高祖から數へて七乃至八代といふことでは共通している。帝室の世系もメンテムより太祖まで七代であるから、これ等のことから一般的にいって明代建州女直の族譜の上限は元末明初と斷定して誤らないやうである。海西女直については明確にし得ないが、成祖實錄の永樂四年二月乙巳の條に、女直野人頭目塔刺赤が來朝して、塔山衛が設置されたことが見えてゐる。この塔山衛よりフルン¹⁾グールのウラ・ハダが出たのであるが、通譜並に清太祖實錄についてウラの世系を見ると、その始祖をドルホチ多爾和齊 *dorhoqi* としてゐるから、或はこの塔刺赤 *ta-laci* と同一人物かも知れぬ。もしそうであれば海西女直においても、明初より新しい系譜が始まることが知られる。結局元末明初を劃して、建州海西などの女眞社會では新たな系譜の段階に入つたと論斷出來よう。滿洲における元末の動亂期に際し、その民族移動に伴つて社會的大變化が起り、この期を以つて滿洲の女眞社會に斷層が生じた結果といへる。それが明初の滿洲統治の進展、具體的には衛所設立と併行し

て新たな秩序が女眞社會にもたらされるに至つたのであつた。その際舊秩序の上に立つ女眞社會の氏族制も、當然新たに再編成されたことは疑ない。ハラ制よりムクン制に、或は舊ムクンより新ムクン制への移行も考へられてよい。この過程内において血縁的要素が漸進的に地縁的要素に變化していつたことは勿論である。

これを要するに、この時期より女眞社會には新しい歴史段階が始まつたといふべく、この期の衛の創設者が始祖乃至高祖とされて、族譜が作られたと思はれる。それを象徴するものとして、清の帝系にメンテム實は建州左衛の創設者猛哥帖木兒が肇祖として記録されたのであつた。

四

元末明初における女眞社會の變化の過程は以上の如くであるが、その已前の狀況は如何なるものであらうか。それが女眞社會氏族制の原初形態であるハラ制であるか、或はムクン制に至る中間形式ともいふべきガルガン *garagan* (支裔) に當るかは容易に明確にし得ない問題である。そこでは一應前述の氏族群について、その姓氏の源流をた

ずね、可能な限りその社會的身分を明らかにしたいと思ふ。ぐわんらい氏族制社會にあつては、姓氏の起源は案外古く、且つ連綿として傳承されるものである。その社會に種族共同體としての規制が存續する間は、その共同體の所屬を表示する名稱は必要不可欠なものであるからである。その効用性について李朝宣祖實錄卷一二七に「胡人之俗。名曰同姓則甚爲親密。每事同心」と記されている通りである。この記載によつて彼等が絶えざる遷住を續けながら、分散の後に起る結合の場合にいかんが姓氏が効用性をもつかといふことが理解されよう。

ところで元末明初以前の姓氏の源流を究めるに當つて、一應その手懸りとなるものは清帝室アイシンギョロ姓に關する開國説話の構成であらう。曾つて説いた如く、その説話は、肇祖メンテムの先世が、建州衛部衆に傳承された大金の支裔といふ觀念を背景にして、前金の始祖晉函の弟である保活里より出たとなすものであつた。そのことにはアイシンギョロ姓の稱呼と相まつて前金との連りを示さうとしたものといへるのであるが、他の氏族群についてもそうであつたか否かを検討して見よう。

前節において八旗構成の主流が、元末明初に於いて東間島の地に見出されることを説いたが、その姓氏について貴重な資料を提供するものは、有名な龍飛御天歌の記事である。説明の都合上、本文のみを掲げると、

如女眞。則幹采里豆漫來溫猛哥帖木兒。火兒阿豆漫古論阿哈出。
 托溫豆漫高卜兒闕。哈蘭都達魯花赤奚灘訶郎哈。參散猛安古論
 豆蘭帖木兒。移蘭豆漫猛安甫亦莫兀兒住。海洋猛安括兒牙火失帖
 木兒。阿都哥猛安奧屯完者。實眼春猛安奚灘塔斯。甲州猛安雲
 剛括。洪肯猛安括兒牙兀灘。海通猛安朱胡貴洞。禿魯兀猛安來
 溫不花。齡合猛安奚灘薛列。兀兒忽里猛安來溫赤兀里。阿沙猛
 安宋胡引答忽。叙出闕失猛安宋胡完者。吾籠所猛安暖禿古魯。
 吾籠所猛安奚灘孛牙。土門猛安古論孛里。阿木刺唐括奚灘古玉
 奴。兀良哈。則土門括兒牙八兒速。孛眞兀狄哈。則古州括兒牙
 乞木那。答比那。可兒答哥。南突兀狄哈。則速平江南突阿刺哈
 伯顏。闕兒看兀狄哈。則眼春括兒牙禿成改等是也。

右の記事の中、その歴史地理上の考證に關しては、すでに池内・和田兩博士の精緻をきはめた研究があつて、殆ど解明されてゐると思ふので、こゝではその成果の上に立つて、姓氏に關し、若干の考察を試みよう。ところで御天歌に見える姓氏名は、凡て女眞名で記されているが、朝鮮の咸鏡道内に住む參散等十一處の女眞の諸酋については、永樂二

年四月に明の遼東千戸王可仁が齎した永樂帝の勅諭の中に、御天歌のそれに對應する漢姓が著録されている。いま論をすゝめる上に一應御天歌の記事を姓氏別に分類し、それに前項勅諭内の漢姓を附して左に掲げよう。

(注) 最上段が種族名、以下地名、官名、女眞名、漢名の順

古論姓	女眞	火兒阿	豆漫	阿哈出
〃	〃	參散	猛安	豆蘭帖木兒
〃	〃	土門	猛安	李里
夾溫姓	女眞	斡朶里	豆漫	猛哥帖木兒
〃	〃	秃魯兀	猛安	不花
〃	〃	兀兒忽里	〃	赤兀里
高姓	女眞	托溫	豆漫	卜兒蘭
括兒牙姓	女眞	海洋	猛安	火失帖木兒
〃	〃	洪肯	〃	兀灘
兀良哈	土門	〃	八兒速	千戸王兀灘
嫌進	古州	〃	乞木那	〃
兀狄哈	〃	〃	答比那	〃
〃	探州	〃	可兒答哥	〃

闊兒看	兀狄哈	奚灘姓	女眞	〃	〃	〃	〃	朱胡姓	女眞	〃	〃	甫亦莫姓	女眞	奧屯姓	女眞	雲姓	女眞	暖禿姓	女眞	南突姓	南突	兀狄哈	
眼春	〃	〃	哈蘭	實眼春	幹合	吾龍所	阿木刺	海通	阿沙	移蘭豆漫	阿都哥	甲州	吾龍所	速平江	阿刺哈伯顏	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
秃成改	〃	〃	都達魯花赤	猛安	猛安	猛安	唐括	猛安	〃	猛安	猛安	猛安	猛安	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	訶郎哈	薛列	薛列	薛列	古玉奴	貴洞	引答忽	兀兒住	完者	完者	完者	古魯	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	朱躡失馬	千戸劉薛列	千戸劉薛列	千戸董貴洞	千戸朱引忽	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

いま、説明の便宜上、最後の「南突」より述べよう。御天歌に南突を *nan-dol* と訓ませ、南突兀狄哈に註して「南

突姓也。因人姓以名焉」としている。兀狄哈が種族名であつて、兀的改即ち *weji* (森林) と *kai* (人) の合成語で

「森林の民」の義であることは從來説かれた如くである。

御天歌によると、ナムドル姓に基づいてその種族名となつたやうに説明してゐる。一方この姓は通譜卷廿一に那木都魯 *namdulja* 氏と著録され、ナムヅル・スイフン・フンチェンの地に住み、本來地名であつたのが姓となつたと記してゐる。思ふにナムヅルの語は *namu+dulu* の合成語であつて、*namu* は赫哲語、滿洲語共に「海洋」の義、*dulu* は恐らく女眞語の「諸勅」、赫哲語の *tsule* だ、「前方」の義であらう。つまり「海に面した地方」の謂と思はれる。そうすると、この姓が地名に由來し、轉じて種族名となつた経過が知られよう。その住地について、李朝成宗實錄の二十二年五月の條に、

速平江。則至末流北入海。彼虜諸種。沿流別居。尼麻車・都骨最居上流。與穢城相對。而相距不過五六日程。南訥最居下流。與造山相對。而相距七八日程。

とある。速平江がスイフン河、南訥がナムドルなることは論ずるまでもなく、造山は東國輿地勝覽卷五十に慶興の東三十五鮮里、豆滿江が海に入る所としてゐるから、造山と

相對するナムドルがスイフン河の最下流より海に面した地に居たことが分る。もつともこの場合のナムドルは種族全體を指してゐるやうである。清太祖實錄によると、萬曆三十八年十一月にエイドゥバツルが東海ウオジアイマンのナムヅル・スイフン・ニングタ・ニマチャの四地方を従へたことを記し、その時來投した諸酋名にカングリ康古里 *kangguri*、カクドリ喀克篤禮 *kakduri*、アング昂古 *anggu*、ミンガツ明噶圖 *mingatu*、ウルカ烏魯喀 *uluka* などの名が見えてゐる。これを氏族通譜によつて見ると、カングリ・カクドリは兄弟で、ナムヅル地方のアイマン(部)の長と記し、ミンガツはバヤン *bayan* のタイトルを有して、スイフン地方のアイマンの長としてゐる。従つて御天歌や成宗實錄の南突或は南訥は、清側史料のナムヅル・スイフンの二地の民を總稱したものであることが分る。それにスイフン地方のナムヅル氏のミンガツバヤンの祖が御天歌に見る阿刺哈巴顔、鮮音 *o-lahab* || *ba-an* に相違ない。通例タイトルは襲稱されるからである。ところで通譜ではこのナムヅル氏を「一姓 *emu hala* の輩」と記してゐる。多くの氏族がムクンを以つて稱されたに對し、なほ「ハラ」を

以つて記されていることが注目し價する。即ちハラがこの社會にあつては未だに氏族制の單位としての機能を保存していることが知られる。そう思つて見るに、同じく成宗實錄卅二年四月の條に「兀狄哈有五姓焉。有三姓焉。皆在速平江邊。尼麻車最強云々」と見え、また「造山之賊。或云尼麻車。或云七姓兀狄哈。九姓兀狄哈」とある。この三姓・五姓・七姓・九姓の兀狄哈は何を指すのか、また尼麻車とどういふ關係があるのであらうか。尼麻車 *i-ma-chya* が清太祖實錄のニマチャに當り、スイフンの河の上流に居住する種族であつた。また三姓五姓などの「姓」が「ハラ」に當るものであることは、ナムドル姓の場合によつて類推されることであるが、その中、五姓兀狄哈について同じく成宗實錄に「尼麻車、写乙未車 *ol-mi-chya*、伊乙仇車 *i-ol-ku-chya*、写乙仇車 *ol-ku-chya*、都骨 *to-kol*」と記してある。これ等の住地がスイフン河の上流とされているから、恐らく今日の東寧附近からその上流にかけての地域であらう。とも角ニマチャは五姓の中の一姓なのであつた。

ところでこの五姓兀狄哈の中、伊乙仇車、写乙仇車、都骨の種族は金代より知られていたと思はれる節がある。即ち

金史卷一に、

自景宗以來。兩世四主。志業相因。……東南至于乙離骨。曷懶・耶懶・土骨論。東北至于五國・主隈・禿答。金蓋盛于此

とある。曷懶は高麗の東北に當るから、その歴史地理上の比定はとも角として、金史の乙離骨 *i-i-lyu* が五姓兀狄哈の中の伊乙仇車、土骨論 *tu-ku-lun* が都骨に當ると見做してよいと思ふ。結局五姓兀狄哈とは、五のハラの種類によつて結ばれたいはゆる氏族同盟といへるであらう。恐らくこの場合のハラの意味は族外婚を行ふ際その機能を果す單位であつたと見てよいのではあるまいか。他の三姓、或は七姓・九姓兀狄哈もこの五姓兀狄哈とほゞその構成を等しくしていたものと考へられる。これ等の種族はまたスイフン河流のナムヅル、ニンゲタ、さらに遠く黒龍江の兀狄哈を加へて聯合體を組織したやうである。それを證するものとして、李朝世宗實錄廿五年八月の條に、

南訥写知介。與黑龍江及写乙未車等諸種写知介。結爲黨援。將分道入寇慶源・穩城・鐘城等三鎮。賊謀已定。遂遣四十餘人。往來愁濱江等處。將指日爲寇。

と記している。南訥がナムヅル、写乙未車が五姓兀狄哈の一、愁濱江がスイフン河を指すことは言ふまでもないが、

遠く黒龍江の兀狄哈と結ぶに至つては驚異に價する。この黒龍江の兀狄哈については楊賓の柳邊紀略卷三に、

自寧古答東北行千五百里。住松花江・黒龍江兩岸者。曰剃髮黑斤。喀喇凡六。類窩稽。產貂。

と記している。この剃髮黑斤は滿洲化したヘヂエ族の謂であるが、ウオヂ窩稽即ち森林の民に類すとあるから兀狄哈の中に含められたのであらう。朝鮮人の稱する兀狄哈は東方ツングース民族の汎稱である場合が多い。ところでそのハラ喀喇が六あつたと記されて、その社會がバラを單位としてゐることは、五姓兀狄哈とその構成を同じくしてゐるものといへる。恐らく彼等は常時ウスリー江を遡つてスイフン河流域の兀狄哈と往復結黨したことは前引實錄の記する如くであらう。

思ふに御天歌の南突氏によつて代表されたスイフン河流域の女直族が、その中には都骨、伊乙仇車の如く金代以來その名の知られた種族が居るにもかゝらず、社會進化の過程においては依然、未開な種族とされる松花黒龍江流域の土人と類似するものであつた。その氏族制に於いては種族が一姓といふ原初形態を示し、従つて依然「ハラ」が社

會的機能を果してゐるものといへる。このように彼等が同時代の他の女直に比して社會分化の過程即ちハラよりムクンへの移行の遅れたのは、その一因に密林地帯によつて文明地域から隔離されたその環境の孤立性によるものと考へられる。彼の習俗として傳へられる未開性は李朝實錄^②に散見する。例へば鮮廷に歸順を示す場合、「以刻木及貂皮爲信」とあるやうに原始的な形式をもつて信義關係を現はし、鮮廷より受けた書契は「不解書啓之辭。三斷印文。各持其一」と記されて、その素朴な趣を傳へている。彼等が「性淳朴」とされる所以である。その故にまた氏族制特有の復讐心の烈しかったことも「野人等報讐。固其性也」とある通りである。彼等はまた狩獵の民であつた。シムル氏の祭神中に貂神が祭られてあつたことを想起すれば、貂皮が信義のあかしとして齎らされた理由が肯げよう。このやうな原始的ともいふべき素朴な狩獵の民は精悍であつた。成宗實錄二十二年四月の條に

兀良哈・兀狄哈。其性強悍。樂於戰鬪。不計生死。深入陣中。且常時屯聚不下三四百人。以三四百。可當我國萬兵

と説明してゐる。その好戰的な性質と未開人特有の集團心

理による猪突性の状を察することが出来る。その故に「兀狄哈の強勇は本より野人の畏る所」とされたのであつた。すでにその驍勇は金國時代より知られたことは金史の兵志に、

嘗以速頻・胡里改人驍勇可用。海陵嘗欲徒之而未暇

とある通りである。速頻がスイフンであり、乙離骨などの名の知られるところからこの地の部族を指したものであること疑ない。

その事情は後世になつても同じであつて、後金國汗のヌルハチは盛にスイフン路の種族を招撫し、その酋首に女を與へてエフ（駙馬）となし、ひたすら八旗の軍力強化を計つた理由が了解されよう。これ道譜に那木都魯が著姓として収録された次第である。

五

つぎに奚灘・朱胡・甫亦莫・奥屯・雲・暖禿の諸姓について見よう。

この氏族達に共通している點は、それが「女眞」と稱され、官職を帯びてゐることである。

まつ官職について見ると、都達魯花赤・猛安・唐括の三種類が存する。都達魯花赤、鮮音 *to-darlio-hoacok* が、元の官名の中、路の長官であるエヘルダルガチ也可達魯花赤 *yeke darugaci* を指すことに疑義はなからう。この官職は普通の都市のダルガチより上級とされるものである。

猛安 *mong an* が同じく千戸長を意味する *ミンガン min-ggan* に比定される。然しつぎの唐括 *char-ko* は女眞語の「百」の義であつて、これは蒙古語ではない。そうすると、「百戸」の官だけは女眞語に譯して使用されたことに間違ひない。とも角この三種類の官職の存在は、後述の萬戸と相まつて、元制に依つたものといへるが、恐らく百戸以下の下部組織は女眞名であつたであらうから、元制がある程度女眞化されて受け入れられたといつて差支へなからう。結局これ等の官職は後でまたふれる如く、元初に合蘭府水達達路に設置された五ヶ所の軍民萬戸府所屬の官名であつたと思ふ。その女眞化された理由について、元史地理志の同條に「其居民皆水達達女直之人。各仍舊俗。……故設官牧民。隨俗而治」とある如く、彼等の舊俗が顧慮された結果によるのであらう。ところで元制では萬戸所屬の千

戸の数は原則的に十人であつたから、五萬戸に屬する千戸即ち猛安は總數五十を數え得よう。御天歌に見える猛安は十六、都達魯花赤一、唐括即ち百戸一である。もつともこの場合は恐らく後述の移蘭豆漫即ち三萬戸に屬するものが多かつたであらうし、それが全數でないことは勿論である。何れにしても元の水達達路五萬戸に屬する猛安であつたとすれば、彼等が金代以來の氏族であつたといふことはいへるであらう。そうすると金史國語解には金代の姓氏が著録されてあるから、一應それによつて確かめる必要がある。もつとも國語解の附記に「其の後氏族或は人に因つて變易し、以つて偏擧し難し。姑くその知るべき者を載す」と記してあるから、もとより充分なものではない。以下これによつて猛安の姓氏を考へて見よう。

先ず奚灘である。御天歌に *hi-tan* と訓ませている。なほ同書に記載されてある奚灘姓各酋の住所は、先人の研究によつてほぼ分明してある。前掲表の順に従つて哈蘭が即ち朝鮮の咸鏡道の咸興、幹合が明川の附近、吾籠所が豆滿江外慶源の南、五龍河口の邊、實眼春が密江 *mi-jang* 流域に當る。阿木刺については諸説あるが、一應スイフン河流域

に近い箇所としておこう。⑧。そうすると、咸鏡道から東間島にかけて分布していたことになる。この姓は金史國語解には見えない。然し、通常姓が地名に由來することは、金史の完顏昂の傳にも「凡そ部族は既に某部と曰ひ、後に某水の某と曰ひ、又某鄉村と曰ひ、以つて之を別ち識す」とあるによつて知らる。某水或は某郷が金代の謀克 *mu-ke* (水の義) であり、これよりムクンの語が出たと推定されるから、奚灘姓も彼等の遷居前の住地である五萬戸府の地域、即ち混同江南北の地域に見出される筈である。明實錄を見ると、永樂六年二月丙申の條に、女直野人が來朝し、十二衛を設置したことを記しているが、その中に奚灘河衛の名がある。その後、同じく永樂十四年八月辛酉の條に、

弗提衛奏舉女直野人頭目牙速等。堪任以職。從之。設吉灘衛云々

と見えている。奚灘・吉灘は同音異譯と見るならば、これが有名な弗提衛と關係があつたことが分る。弗提衛は今日の富錦におかれたのであつた。これに従つてその地を清内府一統輿地秘圖で檢出すると、松花、黑龍二江の合流地點から、黑龍江の本流を逆つた所にギタン *gi-tan* 或は *gitan bira* (ビラは川の義) の名がある。恐らく奚灘河衛或は吉灘衛

の置かれた地域であらうし、同時に御天歌の奚灘姓の原住地ではあるまいか。八旗氏族通譜卷四三及五一に喜塔臘 *Kitara*、奇塔喇 *Kitara* の二姓が見えている。前者がニヤハンニ雅罕山 *niyahan*、長白山、フウ城、ワルカ等の間島地方に、後者が松花江流域に住んだとしてゐる。通譜は二姓に分けてゐるが、同じ通譜のヒタラの條に「ヒタラは一姓」としてゐるから、元來は同じ系統であつたのであらう。御天歌の奚灘氏の原住並に遷住の地域は、ヒタラ氏とほぼ一致しているから、二者の間に關係があるのであるまいか。この姓は太祖の生母と同姓であつた。滿洲實錄卷一によると太祖の父タクシの先夫人で、ハラは喜塔喇 *Kitara*、名はエメチ額穆齊 *emeči* と記している。ヒタラ姓は一姓であるからには、この姓も當然關係があつたとしてよい。このあとにタクシはウラの巨酋ワンハンの養女を貰ひ、やがて太祖が追ひ出される結果となつたのは有名な話である。とも角この奚灘即ちヒタラ氏に都達魯花赤や猛安が輩出してゐるから、有力な氏族であつたに違ひない。先に嘯亭雜錄によつて滿洲の婚姻が氏族の高下に左右されることをのべたが、この制約は古くより維持されたことは世宗實

錄二十一年十一月の條に、

大抵幹朶里酋長不娶管下。必求婚於同類之酋長。或兀狄哈・或兀良哈・或忽刺溫

とあることによつて知られる。これを事實に徴して見ると成化年間の建州衛の巨酋李滿住の場合、成宗實錄に「李滿住三妻。一則幹朶里。一則兀良哈。一則火刺溫」とあつて正しくオドリ、兀良哈、フルン族と婚を通じてゐる。然もフルン即ち海西女直が最も重ぜられたことは、同じ記事に「其の子酋長甫加大は火刺溫の所出の如し」とあることから察せられる。太祖の父タクシの場合も同様であつたことは既述の通りであるが、太祖また然りであつた。太宗ホンタイジが海西エホナラの妃の出自であることは隠れもない事實であつた。これで見ると建州女直社會では海西女直との縁組が最高のものとされたやうである。勿論これ等の通婚には部族同盟といつたやうな政策上から出る面があることは否定出来ない。

つぎに朱胡 *Juhu* 姓である。これ等諸酋の住地の中、阿沙が咸鏡道の利原である他、海通・紐出闊失は豆滿江外の地である。この朱胡姓は金史國語解の兀虎 *chi-hu* 漢姓董

とあるに比定される。海通の猛安朱胡貴洞の漢姓は千戸董貴洞とされてゐて、朱胡が金代の兪虎姓であることは益々疑を容れない。但し氏族通譜にこの姓に當るものを檢出し得ない。

つぎに甫亦莫 *phi-u-mo* 姓である。これの住地が移蘭豆漫とあるから、後述の如く、三萬戸の住地即ち三姓にあたる。甫亦莫姓は氏族通譜卷四四に見えるフオイモ費莫 *foimo* であることに間違なく、通譜によると、この氏族はフェ城、ブルハツ布爾哈圖 *burhatu*、サチク薩齊庫 *sa-ciku*、長白山、ワルカの地域に住んでいた。矢張り三姓の地方から南下したものであらう。この氏族名を乾隆の金史國語解では「斐滿」に比定しているが、恐らくその通りであると思ふ。同じく國語解に斐滿の漢姓は麻氏としているから、オドリ族の著姓馬氏とも關係があるのかも分らなう。

つぎに奥屯 *am-tun* である。その住地阿都哥 *o-tu-ko* は和田博士が指摘される如く、松花・黒龍兩江の合流點より遡つたウヅキ *uduki* 今日富錦であらう。奥屯姓は國語解の「奥屯漢姓曹」にあてゝよいと思ふ。この姓の酋長

奥屯完者の漢姓「崔」は鮮音 *chio* で、國語解の曹のシナ音 *ts'ao* に音通するからである。氏族通譜にはこれに當る氏族を見出せない。

つぎに雲 *un* 姓であるが、これは遺憾ながら國語解にも氏族通譜にも比定し得べき姓氏は檢出し得ない。

つぎの暖禿 *nantu* 姓についても明確なことは分らない。氏族通譜卷六五にナムツ那木圖 *nantu* 姓があり、その住地をホンドホセ渾都和色 *hondhose* と記しているが、いま俄かに證據つけ得ない。

以上御天歌に見える奚灘以下六姓の氏族について考察を試みたが、これ等官職をもつ氏族は、ほとその原住地が三姓より松花江下流にかけての地域、即ち元代の五萬戸、或は明初の三萬戸の所管の地にあたり、また彼等が五萬戸統屬下の千戸乃至百戸の官職に居り且つ金代以來連綿とした系譜を持つ氏族であつたといつてよいであらう。そうすると御天歌に彼等の種族名としている「女眞」はそういつた歴史的傳統をもつ開明の女眞族の謂といふことになる。彼等は元末明初の動亂に際し、海西女直の勃興をさけて、フルハ河を遡り、間島の地より朝鮮の咸鏡道にかけて遷住す

るに至つたのであらう。その地域はすでに農耕定着文化の發達せる地域であり、城郭生活を経験したこれ等開明の女眞族が新に選んだ開拓地にふさはしい環境であつた。

六

つぎに御天歌の括兒牙姓について考へて見よう。これを別に論ずるのは、前二者とはまた異つた氏族構成をもつと思はれるからである。

括兒牙を御天歌に *Kortya* と訓ませているが、これが氏族通譜の瓜爾佳に當ることは疑ない。瓜爾佳姓が明末にコルギ *Ko-er-gi* と發音されてゐたことは既にのべたが、なほシロコ「コフ」によると *gunwalgiya* 姓を口語滿洲で *Ko-rgia* と訓んだと報告しているから間違ひない。ところで御天歌によると、この姓に限つて單一種族でなく、女眞、兀良哈、嫌眞、兀狄哈、闊兒看兀狄哈の四種族を含んでいることに注目されねばならぬ。このことから直にこの姓が同一血族によつて構成されてゐるとは決して言へないといふ結論が出よう。そうするとそこに特別な意味が見出されねばならぬ。それについては後にのべるとして、まづ各酋につ

いて調べよう。

最初の女眞の二酋について見ると、女眞種が五萬戸統屬下にあつて金代以來の氏族と考へられることは前述の如くである。いま金史國語解によると、「古里甲」姓で漢姓「汪」とあるのが見出される。例によつて古里甲の滿洲訓は *ku-i-giya* であらうから、これを *gunwalgiya* ~ *korgiya* にあてゝ差支へない。二酋の住地について、海洋は吉州、洪肯は洪州で何れも咸鏡道の地であるが、その中の洪州に住む猛安兀難は「王」姓であり、さらに和田博士が説かれた三海洋の酋長の一人で、早く明に歸化した王可仁も王姓であるから、これが國語解の「汪」姓にあたることは言ふまでもない。なほ先にあげたグワルギヤ氏の系譜には、二代目に王沙魯、王扎拉達の兄弟が出て王姓を名乗つてゐるから、益々疑ない。ところで一方の吉州の猛安火失帖木兒は金火失帖木とある如く金姓を名乗つてゐる。そういへば後出の括兒牙姓のものは殆ど金姓であるから、この姓の漢姓には「王」と「金」の二姓があつたわけである。この王・金二姓が實は金代の國姓完顔氏のそれと同じであつて、そこに偶然な相似性以上のものが存すると考へられるのであ

る。そのことは別に論ずるであらう。

つぎに兀良哈の土門八兒速である。兀良哈が *o-rin-sai-khai* の音譯であることは諸家の説かれるところで、一應種族名と解すべきであらうが、實のところこの種族については明確に知るを得ない。オランカイのカイの語は、恐らく兀的改 *u-di-kai* のカイと同じく「人」の義であらう。

オランについて推測をめぐらして見ると、明の成祖實錄に「つぎのやうな記事がある。即ち永樂四年十二月の條に、

吾藍兒等處女直野人頭目火失刺・程哥納乞等來朝。置木魯罕山
窩于掃隣狗站之地。

とある。掃隣 *sao-lin* については和田博士は黑龍江のハバロフスク以下の下流地方とされているから、音通から見ても恐らく遼東志に見える「海西水陸站」の中の招陰 *shao-yin* 站にあてゝよいのではあるまいか。この比定に誤りなければ、その地域より察して、吾藍兒 *wh-langer* の地名は、使鹿部即ち *oroncu* の住地より出たものと考へてよいであらう。この吾藍兒がオランカイの語のオランに通ずるとすれば、兀良哈はオロチヨン族となる。もつともシロコゴロフの指摘する如く、オロンチヨンの原義に多義が存し、

「座席・場所・領域」の義であるオロンの語から出て「土着の者」とも解される。そうすればオランカイとは「土着

民」の謂とならう。尚シ氏が「これ等の語が北方ツングースが馴鹿及び馬を飼育している地方、また彼等が固、定せる村落に住し、滿洲族や蒙古人と接觸するに至つてゐる地方だけにしかしられない」(筆者)と記しているのは注目されねばならぬ。當のオランカイがほぼこの後者に當るもので

あるといへよう。滿洲人が彼等を「動物から生まれて來た幾分下等な人間」と見做している事實も併はせ記憶されねばならぬ。この事實を裏書きするものとして、燕山君日記の「兀良哈乃野人平民。幹朶里乃大金支裔也」といふ記事をあげ得よう。社會的身分の相違のよつてくる所以であらうが、そのことには前述のやうな種族的要素が因をなしてゐるものと思ふ。

兀良哈の義が以上のやうなものとして、つぎの土門が豆滿江の地域を指すものであることは論をまたないし、また八兒速 *pai-so* が永樂三年設置された有名な毛憐衛指揮の把兒遜であることも諸家のすでに説かれてゐる所である。彼が事實上の毛憐衛の主宰者であつたことは、李朝世宗實

錄十三年八月己亥の條に「前此、波乙所爲其衛主」とあつて疑ない。ところでこの八兒速の漢姓は兀良哈萬戶劉波乙所とある如く劉姓であつて、既述の括兒牙の漢姓「王」「金」とは異つていたのである。また事實彼は括兒牙姓ではなかつたやうである。そのことにふれて見ると、彼が鮮廷によつて襲殺された後、毛憐衛の主宰者になつたのが大酋浪甫兒看であつた。成祖實錄永樂十四年正月の條に毛憐衛都指揮卞兒罕と記されている人物である。李朝實錄には「兀良哈都指揮劉卞兒罕」ともまた「浪甫兒看」とも記されてゐる。これによつて劉、浪が共通して使はれていることが知られる。従つてこの甫兒看が劉波乙所と何等かの血縁關係を有したことはほぼ間違ひなからう。いま金史國語解によると、「女奚烈」姓があり、その漢姓は郎としてゐるから、甫兒看達の女眞姓は女奚烈であつたと思はれる。この女奚烈 *nu-hsi-lieh* が氏族通譜に見える鈕祜祿 *niu-hu* であつた。普通もさることながら、そうなることについで少し説明を加へれば、この浪甫兒看も鮮廷の出先官吏に扼殺されたのであるが、これ以後毛憐衛衆は大いに鮮廷を怨み侵掠を恣にするになつた。その動きの中心人物

と目されるものに著名な趙三波がいた。彼は「浪李兒罕族親。本居毛憐衛」と記されている如く、李兒罕の姪であつた。この趙三波 *jo-sam-pa* が氏族通譜所載の長白山ニユフル氏の二代目に當る兆三巴 *joosamba* に當ること疑ない。⑤。こう見てくると、長白山のニユフル氏が毛憐衛の初代劉把兒遜と同族にあたり、それがさらに金代以來の女奚烈氏に繋がるものであつたことが明らかにならう。然しながら毛憐衛の部衆がニユフル氏だけでなかつたことは言ふまでもない。その首領と目された阿古車については知るところがないが、バルソンと並稱された愁州今の鐘城居住の着和は金姓を稱していたから、前述の如くこれはコルヤ姓であつたであらう。結局前後の事情は、ニユフル姓のバルソンがコルヤ姓を冠したオランカイ種族と共に、早く東間島の地に定着していたものと推測される。そう考へてくると毛憐衛設立當時の事情にもうなづける節がある。李朝太宗實錄五年九月戊午の條に「猛哥帖木兒必受聖旨。以予爲管下百姓。故不得已入朝云々」と記している。管下は隸屬關係いはゆるジュセンの謂であらうが、貴種のオドリ族猛哥帖木兒に對し、野人の平民であるオランカイ族がそのジ

ユセンになつても別に不思議はない筈である。バルソンはこれに對抗して明に朝貢し毛憐衛を設立したのであるが、そのことにはバルソンが金代以來のニユフル氏であつて見ればジュセンたるに甘じなかつたこともまた理由があるといへよう。

つぎに嫌進兀狄哈に屬する古州の乞木那・答比那・可見答哥である。

その種族名の嫌進兀狄哈について、その中、兀狄哈が「森林の民」であることは前述の如くであるが、嫌進 *hōn-jin* が赫哲・黑津で寫された語と源を一にし、恐らく赫哲語の「東方」を意味する *hōi* に由來したと考へてよいと思ふ。

即ち嫌進兀狄哈とは「東方の森林の民」の謂とならう。この三酋の住地の古州が寧古塔附近に當り、その中、可見答哥が探州、今の敦化附近にいたことは、池内博士の論證されたところである。この三酋は兄弟であつて、その中乞木那が金文乃と稱したから、その漢姓が金姓であつたことに間違ひはない。従つてこの場合の括兒牙は金姓であつた。

最後に闊兒看 *khōar-khan* の意は明確には解き難いが、こ

の語に後述の如く「定着化した」従つて「女眞化した」の意を見出すことが許されれば、これが「定着もしくは女眞化した森林の民」を意味することにならう。またこの種族が李朝實錄に水兀狄哈とも稱され、御天歌に「水居以捕魚爲生者也」と記されているから、元史に見えるいわゆる水達達の類であつた。地名眼春 *an-cun* は明實錄に見える顔春 *yen-ch'un* で、ボシエト灣に臨む地であることは池内・和田兩博士の一致して説かれるところであるが、さらにこれが音楚 *an-cu* 乃至 *yen-chi-ko* で、今のボシエト灣の北岸にある *Novo-Kievsk* の地に比定してよいのではあるまいか。禿成改はまた李朝實錄は「骨乙看兀狄哈萬戶金豆稱介」とも記されてゐるから、彼の場合も括兒牙姓 || 金姓であつたといへる。すでにのべた如く永樂五年にこの地に喜樂溫河衛が設置され、土成哈即ち禿成改は指揮使に任命されてゐる。喜樂溫の語が氏族通譜の記事によつて恐らく *sihi* と音通上の一致があることも前論の如くであるが、その語の意味についてさらに憶測を重ねれば、「魚をとる築をしかけた河口」の義に解される。恐らく魚撈の民である彼等の傳稱をそのまま傳へたものであつて、現在の地名に

比定するのは困難であらう。幸にしてこの比定が許されれば、通譜に見えるスワンのグウルギヤ氏はこの喜樂温河衛の括兒牙豆稱介と何等かの關係があつたと考へられよう。

以上龍飛御天歌に見える括兒牙姓について検討を加へて來たのであつたが、こゝに至つてこの姓の意味を綜括的に考へて見よう。

氏族通譜の瓜爾佳 *guwalgiya* 乃至清太祖實錄の葛兒氣 *korgi* の語は *guwal* ~ *kor* + *giya* の合成語と考へられる。この合成の形式は多く滿洲姓に見られる例であつてキングヤ金佳 *kingiya*、リギヤ李佳 *ligiya* 等とある如くである。この *giya* には通譜では「佳」字をあてゝいるが、それが「家」のシナ音を寫したものであつて、金家・李家の謂に解されよう。主として滿洲人が漢姓をそのまま女眞姓となした場合に多く使はれる。この用例から推して瓜爾佳を「瓜爾の家」と解したのであるが、なほ前述の如く、この姓が金史國語解に存する古里甲から出たとすると、明代の漢姓女眞の場合と少し事情が異なるやうである。國語解にはこれに類する姓として「完顏」がある。この完顏が清太祖實錄の完顏部乃至通譜の完顏姓に系統をひき、それ等

は *wanggiya* と訓ませているから、矢張り *wang* + *giya* でなければならぬ。國語解に漢姓王としてゐるが、これが國王の義から出たことに疑ひない。従つて完顏は「王の家」の謂に他ならない。これに對する古里甲乃至瓜爾佳の中の *kuli* ~ *guwal* は如何なる意味があるのであらうか。この解釋に手懸りとなるものは、シロコゴロフのグウルギヤ姓に關する説明であらう。それによると『グウルギヤ姓は古い滿洲氏族で、ニンゲタより移住した。シュシユ *susu*、スンギャン *sunjian*、ロスキャ *kosk'ja*、スワヤン *suwajan* の四支裔がある。この氏族はキタル *kitar* 及びニマチ *nimaci* 姓と共にコヤリ滿洲 *kojali-manju* なる特殊な群團を形成し、犧牲に豚と羊を共に使ふ。この名の意味は滿洲人自身にも明瞭でないが滿洲人にこの語が「門」といふ語を想起させる』とのべてゐる。この氏族が滿洲族の中で特殊な習俗をもつ集團に屬することを知るが、なほその姓に門を聯想させるとあることに注目されねばならぬ。女眞譯語に「忽里」*huh-li* の語があり、「關」と譯してゐる。これと關係ある滿洲語 *kuren* に「館」くわん「城」の義があり、古くは高句麗時代より城の義の「溝樓」の語がある。こゝう

見てくるとこれ等の語と系統を同じくすると考へられる。gw'al~korに「樓門」「館」「城」の義を見出してよいと思ふ。結局グワルギャ乃至コルギャ姓は館、城を標識とするムクン族の謂とならう。然らばそれが如何なる社會を背景として成立したのであらうか。こゝで金代の「胡里改路」を想起せねばならぬ。胡里改路については金史卷廿四地理志に

胡里改路。國初置萬戸。海陵例罷萬戸。乃改置節度使云々

とあり、その注に「西至上京六百三十里。北至邊界合里賓忒千戸。一千五百里」と記している。

この胡里改の名稱は路名と路治の名と二様に使はれてゐる。路治名としては、それが今の三姓の地に當ることはすでに定説があつて問題はなく、路名としては三姓の地よりほゞ黑龍江・松花江の合流地點までを指し、それが遼代の五國部、元の水達達軍民五萬戸府に當るのである。ところでこの胡里改の名稱の起源に關しては、それが唐代より著聞せる忽汗水今の牡丹江の別名フルハ河の名をとつてつたと説くことも今日定説となつてゐる。然し、そのことはいさゝか疑はしい。三姓の地が遼代の五國部の一である越

里吉であることは池内・和田兩博士が説かれてゐるところであるが、さらに和田博士はこれが渤海の越喜の地であるとされている^⑤。そうすると、三姓の地は勃海・遼時代になつて忽汗の代りに越里吉乃至越喜と呼ばれた筈である。なほ金史卷九四の夾谷清臣の傳を見ると、清臣を「胡里改路桓篤人」と記してゐる。池内博士は五國部の一である越里篤が文獻通考に見える玩突と同じで、現在のワンリホト^⑥ *wanli hoton* に比定されてゐるから、金史の桓篤が越里篤であることは疑を容れない。そうすると、遼の五國部の一地名が金代になつても存続したとあれば、三姓の遼名越里吉も當然存続した筈である。それが金代になつて胡里改と呼ばれたことは、金になつて改稱したに違ひない。この改稱に際して忽汗の名を復活したのであらうか。そうは思はれない。その故に胡里改の名稱が直ちに忽汗から出たとする従來の定説は、認め難いのである。一體遼代の汎稱五國部の名稱は金代にはうけつがれず、公式的には胡里改路と呼ばれたことは池内博士の説かれてゐるところである。ところでこの地域が明初の弗提斤六城の地として知られ、有名な弗提衛の置かれた所であることはこれまた和田博士

が説いてゐられる。即ち永樂實錄の十二年八月の條に

上聞弗提斤六城之地肥饒。命指揮塔失。往治弗提衛城池。令軍民咸居城中。敗獵孽牧從其便。各處商賈欲來居者亦聽。仍命行在兵部榜諭之。

とある。これ等の城郭によつた女真人達が農耕定着生活に入り、かたはら漁獵遊牧に従ひ且つ遠來の漢人と交易を營むさまが窺はれる。この地域に古城趾が多數存することは、曹廷杰ののべてゐるところで、弗提斤六城も必ずしも六城でなく、多數の意味であらう。和田博士はこの弗提斤が「海西東水陸城站」に見える弗陽奚城と、さらに今日の富錦の舊名富克錦と凡て同名異譯とされてゐる。そうするとこの語には如何なる意味があるのであらうか。思ふに弗提斤の音は fu-ti-chin、弗陽奚が fu-ti-hsi、富克錦が fu-k'o-chin となるが、凌純聲によると、赫哲語に fut'in の語があり、*gsan* と同じく「屯子」としてゐる。これによつて明らかにならうに上記の諸語は凡て聚落乃至城郭を意味することになる。いはゆる弗提斤六城の地とは多くの城郭のある地の謂であること疑ない。遼に五國部、明に弗提斤六城の地といへば、金代の胡里改の語がほぼ同義なることは推測に

餘ることである。金史に胡里改はまた里斡改に作つてゐるが、その語が胡里 *huri* と改 *kai* との合成語であつて、*huri* が既述の如く城郭を意味し、*kai* が兀的改の改字のごとく「人」乃至「部」「國」の義であらう。結局胡里改路とは遼代の五國と同義の女真名稱であつたに過ぎない。森林の民の兀的改に對し、城郭の民の胡里改であること疑を容れない。恐らくこの汎稱胡里改路が同時に路治に冠せられたのであつて、同時代の宋側の史料に「五國頭城」と呼ばれた所以であらう。これを裏づけるものとして、前引金史地理志の注があげられる。それによると、北の邊界を合里賓志千戸と記してゐる。この地が元の時、吾者野人乞列迷等處諸軍萬戸府の置かれた哈兒分であり、これが明初設けられた哈兒分衛に當る。哈兒分 *ha-er-fen* は言ふまでもなく、金史地理志の合里賓志 *holi-pin-te* の訛言であるが、この合里は例の城郭を意味する忽里の語に同じく、賓志は滿洲語 *fiyentehe* (分屯の義) 或は *fiyenten* (司) と系統を同じくするものであらう。これから推すと、賓志の語が案外「分屯」或は「分站」の音寫かも知れない。とも角合里賓志は胡里改路の分司の意味であつたと思ふ。路治

の胡里改には萬戸或は節度使が駐し、こゝには千戸がゐる。萬戸の統制を受けてゐたのであつた。その地を今、清内府輿地祕圖で見ると、ドンドン河の流入點より少し上流にガシヤン^ニガシヤン *gassan gassan* がある。この名稱は昔ガシヤン(聚落)があつたのでそれから生じたのであらう。ガシヤンが固有名詞化したのは、そこに千戸所があつたからで、恐らくこの地が合里賓志に當らう。同じく胡里改の地に祕圖ではホトン^ニガシヤンの名が記されているが、これ前述のガシヤン^ニガシヤンに對するものであることは疑ひない。ホトン^ニガシヤンは「城の村」の謂で、何れも萬戸、千戸のそれぞれの治所の名残をとゞめたものと解されよう。

これを要するに五國部を意味する女眞語の胡里改路の汎稱が遼代越里篤の地を路治としたことにより、その路治に冠せられて固有の地名となつたと考へるべきであらう。

こゝに至つて、コルギヤが胡里改國と關聯してくることになる。「城の家」の意であるコルギヤは胡里改國における大小城郭の主領の義に他ならぬ。屠寄の黑龍江輿地圖を見ると、地名として喀拉達即富克錦といふのがあつた。喀拉達 *Ke-la-ta* はハラ(姓)と「長」「主領」の義である。ダ

da との合成語で族長の謂である。恐らく族長の住所が富克錦即ち城郭にあつたため、固有名詞となつたのであらうが、この事實はコルギヤの性格を物語るものであつて、コルギヤは同時に族長の家柄でもあることが推測される。逆にいへばハラ乃至ムクン即ち氏族の長はコルギヤと稱せられ、轉じて姓となつてそれが金代では古里甲姓となり、後代にゲウルギヤ^ニコルギヤ姓として現はれたと見られる。

その成立にはワンギヤ完顔と同じ事情が考へられる。それが女眞社會、就中胡里改國の場合その支配階級に屬することとは言ふまでもない。城郭の民である胡里改が森林の民である兀的改より文明であつて見れば、胡里改國の貴種を象徴するコルギヤ姓が、未開な兀狄哈の酋長の姓となることは、蓋し當然な文化現象といはねばならぬ。すでにシロコゴロフも指摘する如く、起源的或は借用であることを問はず、文化の類似性は、諸群團が共通の起源を有するといふ觀念を生ぜしめる結果となり、彼等を相互に結びつけるものであるとされる。一見して血縁關係が見出されない諸氏族が、同姓を名乗る根據がこゝに見出されるであらう。それ等の事態をさらに端的に物語る社會現象は「賜姓^⑤」とい

ふことであらう。未開なる兀狄哈のゴルギヤ姓酋が漢姓「金」或は「王」を名のることにそのことが理解される。金は國姓、王は支配者の稱號に出るが、所詮同一意味に過ぎない。これゴルギヤ姓の漢姓に金・王二姓が併用される所以である。もつとも賜姓が自稱であることも大いにあり得ることは勿論である。なほそのことは次節においてさらに明らかにするであらう。

七

こゝでは「女眞」種の主領である移闐豆漫即ち三萬戸についてのべて見よう。

最初の古論姓について見ると、火兒阿 *Hotu* 豆漫阿哈出 *Shō-chu* が胡里改萬戸の阿哈出で、明より李善誠の名を授けられた建州衛の始祖であるし、參散今の北青居住の豆蘭帖木兒が李之蘭の名で知られた名酋で、稻葉博士によると、李朝の始祖李成桂と血縁をもつものとされる人物である。唯士門の字里については、池内博士の説かれた如く、女眞種でなく兀良哈種の毛隣衛酋であつたのであらう。

さて阿哈出については成祖實錄の永樂十一年四月に、

鳳州即開元金於虛出所居。於虛出即帝三后之父也

とあつて、「金」姓を稱したことが知られる。その女が永樂帝の妃に納つたとあれば、その貴種たることは察すべく、この金姓が前金の遺裔を表示するものでなければならぬ。同時にすでにのべた如く、その女眞姓は完顔 *wang* *biya* であつた。然し胡里改の阿哈出の氏族が歴史的に見て、金室完顔氏の出であることは俄に信じられないことであつて、恐らく賜姓ではないかと思はれる。金末に賜姓の多かつたことは趙翼も指摘する所で、その中完顔姓については「其功多。或力大可恃以爲援者。則竟賜以皇族之姓」とある如くである。胡里改人については前に一言したようにスイフン地方の衆と共に驍勇用ふべきとされたところであるから、その部衆の主領に賜姓のことがあつても別に不思議ではない。後年になつてではあるが、明廷も建州衛の中、彼の氏族にのみ李姓を授けてゐる。一應推測のもとにならう。

ところで御天歌にこの胡里改の阿哈出の姓を古論 *Kolon* と記している。この姓を阿哈出の前述した身分と照合させて見ると、それが金室完顔氏の諸王に與へた稱號の中の、

國論字極烈 *kuo-lun pei-chi-lich* から出たものと解したい。金史國語解にはこの稱號を「尊禮優崇。得自由者」の謂としている。字極烈がのちの貝勒 *Beile* に當ることは周知のことであるが、女眞譯語に「必忒黑背勒」の語をあげて文官の義としている。必忒黑が滿洲語の文書を意味する *bithe* に當るわけであるが、この用例はベイレも一般化して低位の官稱と化したことを示すものといふべく、この事實から推測すると、金初の尊貴な稱號國論字極烈も、完顔賜姓と同様、後にいはれるほど高貴ではなかつたのであらう。とも角も阿哈出の姓の古論はこの稱號に由來したものと思ふ。のち汎稱完顔が種族名に残り、明廷の賜姓李氏を稱したのであつた。

つぎに夾盪姓について考へよう。この中、幹朶里 *odoli* 豆漫猛哥帖木兒が、建州左衛の創設者であり、清の肇祖のメンテムに當ることは既述の如くである。オドリ¹の由來については李朝世宗實錄に、

吾都里亦是女眞之種。只以居吾都里城故。因以爲號耳。……國家之待吾都里。厚於兀良哈。兀狄哈云々

とあるによつて明らかである。即ちかつてオドリ城に住し

たことからその名が出た女眞種の中の貴種の謂に他ならぬ。吾都里城が胡里改即ち三姓の對岸の地であることは言ふまでもない。すでにのべたように、このオドリ族に傳はる大金の支裔といふ觀念が基になつて清の世系が作られたのであつたが、その世系が歴史的に確實な根據があるとは考へられない。然し「大金の支裔」といふ觀念はどうして成立したのであらうか。李朝實錄によると成祖が猛哥帖木兒を皇后の親であると言つたと記してある。これについて和田博士は阿哈出の女が帝妃であつて、猛哥帖木兒が阿哈出と恐らく婚姻關係のあつたことから皇后の親とされたのであらうと説かれている。博士のこの説明からでも「大金の支裔」の觀念を引き出すことも出来るが、もう少し考へべきふしがある。

オドリ族が女眞種とあれば、これまでの例に照して、一應は金代とその姓氏に於いて聯關がある筈である。御天歌に見える來盪 *Kiaron* 姓の諸酋の中、禿魯兀、今の威鏡道端川の猛哥不花が同地の千戶佟參哈、佟阿蘆と何等かの關係のあることは和田博士の指摘されてゐるところであるが、當の猛哥帖木兒が周知の如く、童姓であつたこと、併はせ考

へると、夾温姓の漢姓が佟或は童姓であつたことは疑ふ餘地がない。然して佟童は何れ tung の音を寫した假字でなければならぬ。建州左衛のドン donggo 姓はこの tung + giva の訛つたものであつた。ところがこの tung 姓を考へる上において甚だ注目すべき事實がある。滿洲祭神祭天典禮によると、清廷が堂子を祭る際、祀の神位に明の鄧子龍の神位があつたことを傳へてゐる。鄧は音 tung であるが、これが祭神になつた理由は、清の太祖が子龍と舊誼があつたからと説かれてゐる。そのことは孟森も指摘してゐる如く、史實としては全くあり得ないことで、子龍は明末の猛將として知られてゐるが、主として華南に活躍して苗賊の討伐に従ひ、のち豊氏朝鮮の役に水軍を率ひて戦死した人であるから、清の太祖と舊誼などがある筈がない。恐らく傳聞による附會であらう。然しこのような附會が生じることには佟、童さらに鄧に通じる tung 姓の祭神が神位中にあつた故であらう。清廷において、然も祭天の際堂子に祭られる祭神といへば、それがその氏族にとつて甚だ重要な意義をもつていた證據であらうが、同時に附會が行はれることには、祭神のもつ意味がすでに忘れられたこと

を示すものといへよう。もつてこの tung 神の成立の古いことであつたことを知る。恐らく金代に出現したものであらう。今國語解を見ると「夾谷」姓が存し、その漢姓を「全」としている。夾谷の滿洲音は例によつて ki(ɡi)-a-ku 全は「同」で音 tung である。この夾谷姓が夾温に當ると考へた。夾温は kion で、語尾の n 音は省略されることが多いから、強ち無理な比定ではあるまい。曾つて御天歌の夾温が清朝の姓であるギョロ gioro と關係があるように説いたが、金代ではそれが夾谷の字で寫されたのではなからうか。その漢姓「全」の意味については、つぎのように考へたい。金の夾谷姓の中、金の世宗朝に活躍した名將に前引の夾谷清臣がいた。彼が胡里改路の桓篤、即ち五國部の一の越里篤の人であつたことは既にのべたが、同傳に胡里改についての記述がある。即ち章宗が清臣に問ふて、

胡里改路風俗如何。對曰。視舊則稍知禮貌。而勇勁不及矣。

と答へてゐる。この記事によると勇勁であつた胡里改人も世宗・章宗のころ漸く開明についた狀況が察せられる。完顔の文化が及んだことであらう。遙か後年の海西女直と建州女直の關係をほらふつさせる。ところでこの清臣の女が

金廷後宮の九嬪第一位の昭儀にとり立てられ、その結果清臣は萬國公に封ぜられるが同時に「賜同本朝人」と記されている。本朝人といへば、恐らく完顔部衆のことであらうから、これと同列におかれたことの謂に相違あるまい。恐らくこのやうな特權を漢姓化して「仝」となしたのではあるまいか。これが夾谷の漢姓「仝」の由來であるが、また清臣は恐らく當時にあつては胡里改路隨一の貴戚と見做されていたことは想像に餘りある。開明に向ひつつあつた同地方の部衆の中、夾谷姓のものが漢姓同を襲用しだしたのであらうし、その時は當然祖宗神の中に *tung* 神の發生が考へられる。そのことによつて、氏族制社會内における尊貴な身分の獲得と文化の起源の同一性が確認されることになるのである。時代の経過と住居の移動によつて、奉持した神位の意味は次第に忘れられ、祖宗神の一なる *tung* 神に終、童さらには清朝になつて、屬夷時代の姓を廢棄して鄧子龍の誕生といふことになつたのであるまいか。同時にオドリ族のもつ「大金の支裔」といふ觀念はこの *tung* 神に附隨して發生したものと考へるものである。

最後に三萬戸の一人である高姓の豆漫卜兒闕について見

ると、國語解に「高は乞石烈」としてゐる。彼の住地である托溫は、三姓の下流、屯河の域にある固木納城であることは諸家の説かれたところである。屯河が金代に陶溫水の名で知られ、その地に居た紇石烈部が高氏の先世であるに相違ない。乞石烈 *Ki-shih-ieh* と紇石烈 *he-shih-ieh* が同一姓であることは疑ないからである。三萬戸のうち、高氏のみは元末明初に東間島の地に到らなかつた。氏族通譜に見えるヘセリ赫舍里 *heseri* 氏はこの姓と關聯があると考へられるが、通譜によると、この姓氏のものが多く海西フルン國に従つた形跡があることは、胡里改の故地に殘留した高氏がのちになつて海西女直に投入したと思はれるのである。

む す び

以上清の太祖が後金國を建設するにあつて、それに協力した滿洲諸氏族について分析を試み、各々の出自を明らかにすることによつて、それが太祖政權の成立に果す役割を解明したつもりである。その中、入關後も八大家と稱された氏族については、その源流は遠く金代にまでつながる

ものであることを知つた。金元にかけて胡里改路に形成されたいはゆるイラン・ツメンを主領とする支配體制は、元末の動亂によつて解體し、その中オドリ族を中心とした集團は南下して、東間島の地に於て再び結ばれ、そこで新に土着氏族をあはせ、さらに興京の地に西遷すると、その地の漢化せる氏族群と結合し、一方東間島の地より被支配者であつた未開氏族を收容して軍力の補充をはかつた。このようにして太祖の政權は確立されて行つたのであつたが、それが可能であつた根本については、當時の滿洲社會の構成がその基盤として種族共同體即ち氏族制社會の上に立つものであつたからとなすものである。なほ彼等が依然氏族制を維持するに至つた社會的經濟的構造の分析については稿を改めて説くことにする。

注

- (1) 三田村 清朝の開國傳説とその世系に就いて 立命館大學五十週年記念論文集
 (2) この中には一人一姓といふものもあるし、通譜自身希姓としてゐるものもある。また來投年代も異り、すべてを同じ比重で取扱ふわけにはいかぬ。
 (3) Hauer は *durun + nirtugan* の語を *durun + nirtugan* の合成語とし

ている。 *durun* は官印、 *nirtugan* は系圖の意。

- (4) 三田村 滿洲シャマニズムの祭神と祝詞 石濱先生古稀記念 東洋學論叢
 (5) *mukun* の語の中の *u* 音は從來、メレンドルフの説により長音として *ü* の表記を附したが、同學今西君の説に従ひ、それを訂正し、*ü* の表記を使ふ。以下すべてこの例にならう。なほ同氏の「滿字音考」(東方學紀要1所載)を参照されたい。
 (6) 原文は *mukun falga* になつてゐる。二語連ねて宗族の義があるが、こゝは集會所の意
 (7) 滿洲祭神祭天典禮文獻篇に見ゆ
 (8) 三田村 前掲論文(開國傳説)
 (9) 普通乾隆改修本と稱せられるが、雍正帝の序文のあるやうに實際上は雍正帝の改修である。明史その他、刊行されたのが乾隆帝の時であるため、同帝の事業とされるが、事實は雍正帝の意圖の反映とすべきものがある。なほ三田村前掲論文参照
 (10) 八大家といふけれど、數へると實際は九大家である。なほ「九」を「八」としたか分らない
 (11) 宣祖實錄卷一八九 宣祖三十八年七月戊子の條
 (12) 大金國志卷三九 男女冠服
 (13) 滿洲實錄卷四
 (14) 褚英は萬曆四十三年に三十六才で死んでゐるからその生年は萬曆八年となる。それ已前に修氏と結ばれたとすれば五年とならう
 (15) 三田村 前掲論文(開國傳説) 二一七頁並に注五
 (16) 歴史地理の比定は大體滿洲歴史地理第二卷の「清初の疆域」

によつた

- (18) 和田博士「清の太祖興起の事情に就いて」の註十六並に乾隆欽定標注戰蹟輿圖
- (19) 和田博士 明初の滿洲經略下 東亞史研究四一九頁
- (20) 金史卷卅五 禮八 長白山
- (21) 滿文太祖老檔卷十四 天命五年三月八日の條
- (22) この引用文はいはゆる武皇帝實錄に據つた。峻兒戈はソルゴの音寫であるが、姓の葛兒氣を記しているのは、武皇帝實錄だけで、滿漢文共に缺いてゐる。
- (23) 詳細は島田好 錫伯、卦爾察部族考 滿洲學報第六參照
- (24) Jiha は「錢」で意味が通じない。ドゴンが「渡し場」であるから、「ジハ」は恐らく刀船を指す Jaha の訛音であらう
- (25) 七代をあげると、①索和濟巴顏②兆三波③德魯拉哈④薩爾都巴圖魯⑤阿靈阿巴顏⑥都靈格⑦額亦都巴圖魯である
- (26) 池内博士 鮮初の東北境と女眞との關係(滿鮮地理歴史研究報告二、四、五、七) 和田博士 明初の滿洲經略(東亞史研究)
- (27) ヨルド語で kai' くテ語で hai' といふ。女眞譯語に兀住刺孩(酋長) 哈哈愛(男子) 阿哈哈(奴婢)の語の語尾孩、愛は何れも kai' hai' の音寫であらう
- (28) 成宗實錄廿二年四月の條に「彼土初面。有壽地嶺。林木深阻。道路險隘。過此則平原曠漠。道路平易云」とある。壽地は wei: (密林)の對音
- (29) 成宗實錄二十三年六月戊辰の條
- (30) 前田直典 元朝行省の成立過程 史學雜誌五十六篇第六號十二頁
- (31) 和田博士はスイフン河下流の南方として、池内博士が吉林の東の那木窩集にあてられたのを否定している。明初の滿洲經略下(東亞史研究三八〇頁)。なほ清内府一統輿地祕圖を見ると、ニングタの北方、牡丹江に沿ふて、アムラ amura 河及び同名の山がある。恐らくこの地方ではないかとも思へるが、しばらく後考にまつ
- (32) 屠奇の黑龍江輿地圖に「喀拉達即富古錦」とし、さらに富克錦河を越へた所に喀爾喀莫霍悅洛即俗稱富克錦衙門としている。喀爾喀莫は kalikane の對音で清内府一統輿地祕圖を見ると、ウツキの遙か西方に當る。今の富錦とその位置が合致しないが、記事の詳細なことからは一考に價するのではあるまいか
- (33) 和田博士 前掲論文 東亞史研究三八六頁
- (34) シュレンケによると、オロチオンが朝鮮界に近いスイフン川の北岸に至る日本海沿岸地方を獵場としたといふ。(島田好 近代東部滿洲民族考、滿洲學報第五號七二頁) そうするとオロチオンの名稱が傳はつても格別おかしくはないであらう
- (35) シロコゴロフ 北方ツングースの社會構成(川久保・田中譯) 一〇二頁
- (36) 李朝世祖實錄卷廿五年九月辛未の條
- (37) なほ世祖實錄十年六月丙戌の條に「趙三波子車多」とある。この車多の鮮音は chyada であるから、氏族通譜に見える兆三巴の第五子察岱費揚古 cadai fiyanggu に當ること疑ない
- (38) 島田好 前掲論文 八四頁
- (39) 池内博士 鮮初の東北境と女眞との關係 滿鮮地理歴史研究

報告第二卷二七八—九頁

- (40) 氏族通譜卷四三秦楚魯氏の條に渾春音楚地方とある。なほ James の The long white mountain の p. 352 参照
- (41) Hauer と sigiyambi として「築をしかける」の意としてくる。語幹 sigi から來てくるのであらう
- (42) S. M. Shirokogoroff ; Social Organization of the Manchus p. 21.
- (43) 和田博士 渤海國地理考 東亞史研究 一〇五頁
- (44) 池内博士 鐵利考 滿鮮地理歴史研究報告第三一一八—九頁
- (45) 和田博士 明初の滿洲經略 右書 三六〇頁
- (46) 凌純聲 松花江下游的赫哲族下冊
- (47) 松漢紀聞 なほ池内博士鐵利考一一七頁参照
- (48) 和田博士 前掲論文
- (49) シロゴロフ 北方ツングースの社會構成譯二〇八頁
- (50) 清の太祖が覺羅姓を興へたことは太祖實錄並に氏族通譜に散見してゐるし、それ以外フルン國でも改姓のあつたことも同じ書に見えてゐる。太祖は未だバイレ時代であるからこれによつて賜姓は皇帝に限らず、廣く下級の身分でも行つたのである。
- (51) 稻葉博士 光海君時代における滿鮮關係
- (52) 池内博士前掲論文(鮮初の東北境)
- (53) なほ李朝實錄によると彼の五世の孫の完者禿が部衆より大ハンを意味する連罕と稱された。
- (54) 趙翼 二十二史劄記卷九八 金末賜姓之例
- (55) 和田博士 前掲論文
- (56) 震鈞 天咫偶聞 堂子(滿洲祭神祭天典禮文獻篇)
- (57) 孟森 清代堂子所祀鄧將軍考(明清史論著集刊) 孟森は鄧子龍の代りに成化三年に戰死した鄧佐のこととしているが、五十歩百歩の論で、これでは古くから重修姓の存した事實は説明出來ない
- (58) 三田村 朱蒙傳説とツングース文化の性格 立命館文學廿五週年記念號
- (本稿は昭和三十二・三年度文部省科學研究費による研究の一部である。)

Manchu Clans in the Late Ming and the Early Ch'ing 清

Taisuke Mitamura

The so-called Manchu Eight Banners, which were the mainstay of the military strength of the Ch'ing dynasty, were organized on a clan or sib basis in spite of the strong impact of Chinese culture. Their system had its origin in the Chin-Jurchen period, when they inhabited the Huli Kailu on the Sungari. In the latter part of the Yüan period they were known as the Three Clans of Ten Thousand. In the troublous period in the closing days of the Yüan they began to migrate southward, and the Odoli Ten Thousand under Mengge Timur moved to Huining on the Korean border, where they absorbed the aboriginal Jurchens. They were known as the Chinchouwei and Maolienwei whose society was organized on a complex clan basis. The founder of the Manchu dynasty subjugated these tribes, which had moved southward, and set up the Later Chin dynasty. This dynasty was still largely composed of the Odoli clan mixed with the aboriginal people.

Migrations of the Chienchou 建州 Jurchens

Nagahiro Kawachi

During the period from 1410 to 1440 under the Ming the Chienchou Jurchens made nine migrations. The times of six migrations are known, while the rest unidentified. These migrations took place, as a rule, in March and April, but earlier or later under the pressure from the outside. Though there were other minor causes, the main cause of migration was agricultural, since agriculture was the mainstay of their economy and mid-April was the time to begin cultivation.